徳島大学附属図書館における貴重資料公開の歩み—目録作成からデジタルアーカイブまで

佐々木　奈三江（徳島大学附属図書館）

1.　はじめに

徳島大学附属図書館（以下「当館」）は，貴重資料として2つのコレクション「蜂須賀家家臣成立書并系図」，「近世古地図・絵図コレクション」を有している。これらは，江戸時代に阿波（徳島県）と淡路（兵庫県淡路島）の両国を支配していた徳島藩及び蜂須賀家ゆかりの資料を中心とした資料群である。当館では，これらの資料の保存と利用を両立させるため，目録整備や複製の作成，デジタルアーカイブの整備など，その時々で最適と思われる技術を駆使し，メディア（媒体）を更新しながら利用に供してきた。本稿では，当館の貴重資料公開の歴史をたどりながら，デジタル化がすすむ図書館の，今後の展開や課題について考える。

2.　蜂須賀家の蔵書について —「阿波国文庫」と「不忍文庫」—

当館貴重資料のうち，近世古地図・絵図コレクションの中には「阿波国文庫」「不忍文庫」の印影があるものがある。平井[1]によれば「阿波国文庫」とは「蜂須賀家旧蔵の大集書（約6万冊）のことで，寛政期に活躍した国学者屋代弘賢（1758～1841）の蔵書約5万冊と，阿波藩儒で幕府儒員も務めた柴野栗山（1736～1807）の蔵書約9千冊を中心に収集されたわが国屈指の大名文庫である」と解説している。このうち屋代弘賢の旧蔵書類には「不忍文庫」「阿波国文庫」の蔵書印が用いられている。阿波国文庫の蔵書の多くは，1869年（明治2）に開校された藩校長久館，1874年（明治7）開校の期成師範学校（のちの徳島大学学芸学部），1899年（明治32）設置の徳島県立徳島中学校附属図書館へと引き継がれた。1917年（大正6）に徳島県立光慶図書館が開館すると，阿波国文庫のうち30,905冊が委託されたが，1945年（昭和20）の徳島空襲により焼失，疎開して焼失を免れた稀覯本約660冊も，光慶図書館の後身である憲法記念館の出火により全て焼失した。当館に伝わる阿波国文庫由来の資料は，これらとは別に常三島別邸に保管されていた資料が収蔵されたものと考えられる。

3.　徳島大学附属図書館の貴重資料について

3.1.　「蜂須賀家家臣成立書并系図」

本コレクションは，徳島藩士各家が代々の家督相続者について，召出・相続・隠居・死亡の期日，禄高，役職及び系図・家紋などを書き上げ藩庁に提出した資料である。1834年（天保5）に作成され，その後1861年（文久元）に書き継いだものが大部分であるが，一部寛政年間や明治期に書かれたものが含まれている。徳島大学で所蔵しているのは，家臣のうち最上級と最下級を除く，家臣団の中核にあたる1,802家の家譜となっている。

来歴については，当館に納入時の記録がなく，詳細な経緯は不明であるが，後述する「徳島藩士譜」上巻の序文には，戦後蜂須賀家で処分されることとなった資料のうち『家中録』（本コレクションのこと）だけが徳島市内骨董商の手にわたり，大部分がまとめて徳島大学附属図書館に納入された，との記載がある。

3.2.　「近世古地図・絵図コレクション」

徳島藩主旧蔵の古地図・絵図を中心とした約200点のコレクションである。25万石の大大名であった蜂須賀家のコレクションは優品が多く，学術的にも文化財的にも資料的価値

が高い古地図，絵図を多く含んでいる。これらの古地図の中には，「阿波国文庫」の印影があるものが79点あり，このうち19点には「不忍文庫」の印影もある。なお，「徳島」及び伊能図には，両文庫の印影はみられず，蜂須賀家が所持していた藩政文書だと思われる。

来歴については，当館には資料受入時の図書原簿しか記録がなく，受入れの経緯は不明であったが，絵図のデジタル化事業に際して基礎調査を担当した平井[1]により来歴についても調査がなされた。それによると，蜂須賀家資料の売却の際，資料の存在を知っていた徳島大学学芸学部教員等により資料受入の働きかけがあったことが示唆されている。

3.2.1. 「伊能図」について

本コレクションのうち，「伊能図」は特に注目度の高い資料である。当館保有の伊能図については，長らくその史料価値が認識されていなかったが，1994年（平成6），伊能図研究の第一人者である渡辺一郎氏の来館調査[2]により，作成時の針穴が明確に確認できる完成度の高い副本であることが判明した。その後，徳島大学の研究者も20年以上にわたり科研等で継続的に調査研究を進めており，作成過程の解明や「伊能図学習システム」開発などの研究成果へとつながっている。

4. 貴重資料のメディア変換 ―保存と利用の両立のために―

貴重資料の「利用」と「保存」を両立させるための目録作成，メディア変換について主要な取り組みを紹介する。

4.1. 目録作成

「徳島藩士譜」（上・中・下巻，1972～1973刊行）は，「蜂須賀家家臣成立書并系図」をもとに，宮本武史氏（1961～1971 附属図書館事務長）が12年をかけてまとめ上げた総索引である。これは，徳島藩の家臣の家系とその家臣を歴代順に収め，禄高，役職没年等が分かるよう編まれたもので，当館所蔵の資料に加え，散逸していた老中等の記録も調査の上収録しており，徳島藩家臣の情報を網羅した労作である。

また，「近世古地図・絵図コレクション」については，1979年に附属図書館文化行事として開催された「日本現代地図展」の目録に，「徳島大学附属図書館所蔵古地図目録」が併載された。この時に付した分類記号が，現在のデジタルアーカイブにも引き継がれている。

4.2. メディア変換

「蜂須賀家家臣成立書并系図」は，1975～1982年（昭和50～57）と，1993年（平成5）の2回，マイクロフィルム化されている。いずれも資料として受け入れした記録は残っているが，作成の経緯については正確に伝わっていない。また，2005年（平成17）には，科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「近世大名（蜂須賀家）家臣団家譜史料データベース」によりマイクロフィルムから印刷・製本された複製本が作成されている。

「近世古地図・絵図コレクション」については，1993年度（平成5），阿波国絵図関係51点の複製図を作成している。本事業のきっかけとなったのは，その前年に亡くなった職員の遺族から寄付金の申し出であった。故人の遺志に沿うものとして長年の懸案事項であった古地図の複製が計画され，さらにより多くの複製を実施するため，県内の関係機関にも協力を申し入れ，実現した。

5. 貴重資料のデジタル化

資料のデジタル化は複製の一形態であるが，メタデータの付与，インターネットによる公開などの手段を講じることで，来館せずとも検索から原資料（の内容）まで，一気にたどりつくことが可能となる。現在当館では「蜂須賀家家臣団家譜史料データベース」,「近世古地図・絵図コレクション高精細デジタルアーカイブ」,「伊能図学習システム」を公開している。

5.1. 蜂須賀家家臣団家譜史料データベース

本データベースは，平成 17 年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「近世大名(蜂須賀家)家臣団家譜史料データベース」作成事業により「蜂須賀家家臣成立書并系図」を画像データベース化したものである。日本近世思想史を専門とする本学教員が事業代表者となっており，原資料の精査を行うとともに，研究者にとって有益な検索となるよう項目を整備する等，研究者の目線を生かしたデータベースとなっている。

https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/dbhachi/hachi.html

5.2. 貴重資料高精細デジタルアーカイブ（近世古地図・絵図コレクション）

当館では，1997 年度（平成 9）から近世古地図・絵図コレクションのデジタル化に取り組んでおり，平成 10－11 年の文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費（データベース）により「貴重資料高精細デジタルアーカイブ」としてインターネット公開することが出来た。これは，国内の古地図関連のデジタルアーカイブの中ではかなり早い時期での公開であった。また，2019 年（平成 31）2 月にはクラウドファンディングを実施，画像を追加公開するとともにメタデータへの英文併記も実施している。さらに 2021 年（令和 3）には図書館振興財団助成事業に採択され，公開画像を増強した。ここまでの事業で，所蔵資料約 200 点のうち，約 160 点余の画像公開が出来ている。本事業も開始当初から現在まで，地理学を専門とする本学教員と共同で実施しており，本デジタルアーカイブの高精細画像は，研究資料として利用できるよう「絵図中に含まれる最小サイズ（1 ミリ以下）の文字情報を明確に再現できる品質」を目指して作成されている。書誌データについても，古地図にふさわしいものになるよう，研究者の指導のもと，きめ細かい項目が設定されている。

https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/index.html

5.3. 伊能図学習システム

本システムは，平成 26 年度公益財団法人図書館振興財団助成事業「伊能図の超高精細画像を援用した地域学習コンテンツの作成」により構築したものである。本システムでは，伊能図の高度な測量技術と作図技術を支えた「針穴」を閲覧できるよう，原寸に対して 800dpi の高解像度による撮影を実施して作成した高精細画像を公開しており，コンピュータ上の画面で 0.2mm の針穴を確認することや，伊能図の針穴画像／現代地図／空撮画像との比較や重ね合わせての閲覧が可能となっている。

「伊能図学習システム」は単なるアーカイブではなく，利用目的を明確にしたシステムの構築であり，新しい価値を創造した事例といえる。

https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/inohzu/

6. 今後の活用と課題 ―オープン化を目指して―

奇しくもこのコロナ禍で，どこにいても利用できるデジタルコンテンツの有用性の意義

は大いに知られるところとなった。当館が今後目指すのは，「デジタルアーカイブ社会」進展への寄与である。「デジタルアーカイブ社会」とは「デジタルアーカイブが日常的に活用され，様々な創作活動を支える社会・学術・文化の基盤となる社会」であり，「デジタルアーカイブによって，日々生み出される様々なデータが共有され，誰でも簡単にアクセスができ，さらに日常的に利活用できるように二次利用条件が整備されていることで，誰もが新しいコンテンツを生み出せる社会」(3) を指す。

ここで重要なのは，デジタルアーカイブ自身の可視化とオープン化である。各機関がそれぞれデジタルアーカイブを公開している状況では，利用者にとっては通覧性がないため，必要な情報へとナビゲーションし，様々な分野をつなぐためのポータルサイトの構築が望まれていた。そこで登場したのが「ジャパンサーチ」である。当館では，今秋には，「貴重資料高精細デジタルアーカイブ」がジャパンサーチ上で公開できる見込みとなっている。これにより，当館資料の発見可能性が高まることを期待している

一方のオープン化とは，データが「インターネットを通じて広く公開されており，商業利用も含めて，目的に応じた　活用可能な条件が明示され，手続を要せずに提供されるデータが第三者に自由に利用できるようになっている状態」(4) を指す。当館では，オープン化の促進を目指して「貴重資料等利用規則」を改訂した (5)。オープン化の対象はメタデータ及びダウンロード用画像とし，データの真正性を確保するため「CC BY」（クリエイティブ・コモンズ・ライセンス 表示 4.0 国際）相当の条件で提供することとしている。

今後の図書館は，資料形態にかかわらず，あらゆる知的財産を未来に継承していく必要がある。そのためには，従来の図書や雑誌の管理とは異なるメタデータ管理やデジタル資源の扱い方に長けた人材確保が重要である。また，デジタルアーカイブがもたらす効果は従来と同じ指標では測りがたい。デジタルアーカイブ整備の必要性を広く理解してもらうにはどのような評価方法が適切か，検討が必要だと考えられる。

＜引用文献・参考文献＞

(1) 平井松午．徳島大学附属図書館蔵「近世古地図・絵図コレクション」の来歴．徳島地理学会論文集．2001，4，p.179-191.
https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/files/article_hirai.pdf，（参照 2022-08-23）

(2) 渡辺一郎．徳島大学附属図書館蔵の伊能図について．月刊古地図研究．1994，25(10)，p.2-7.

(3) デジタルアーカイブジャパン推進委員会・実務者検討委員会．3か年総括報告書　我が国が目指すデジタルアーカイブ社会の実現に向けて　令和 2 年 8月19日，p.12.
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_suisiniinkai/pdf/r0208_3kanen_houkoku_honbun.pdf，（参照 2022-08-23）

(4) 　同上　p.3.

(5) 徳島大学附属図書館．“貴重資料のデジタル画像がダウンロードできるようになりました(2022/06/10)”．徳島大学附属図書館ウェブサイト．2022-06-10，
https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/news/news22/2022061001.html，（参照 2022-08-23）.

上記の他，阿波国文庫については次の資料を参照した。

藤丸昭．図書館の理念と実践－阿波国文庫からの成長－．原田印刷出版．1977.

三好昭一郎，大和武生編著．徳島県の教育史．思文閣出版．1983.